

2015年7月19日 メルボルン日本語キリスト教会 主日礼拝メッセージ (要約)

柏倉 秀吉

聖書：ローマ1：16-17 タイトル：「信仰によって生きる」

---

「ローマ人への手紙」1：16－17。「ローマ人への手紙」とは、短く「ローマ書」または「ロマ書」も言われている。著者は「パウロ」である。

彼はイエス・キリストのことを世界中の人々に正確にお伝えする「使徒」である。パウロがこの手紙を記した時、彼はまだローマに行ったことがなく、コリントに滞在していた時（第三次伝道旅行時）に、ローマから退去してきたユダヤ人（アクラとプリスキラ等）たちと会い、執筆の必要を感じ、この手紙を記したようである。これは紀元55－57年ごろである。世界はローマ帝国時代で、皇帝はネロであった。彼は派手好きで、豪華なショーなどを開き、公共建築も盛んに行った。それゆえローマ市民には一応の人気があったようである。

しかしその後の64年には、「ローマの大火」といわれている、市の中心部に火事が起った。皇帝ネロは、増えつつあったキリスト教徒をその火事の放火犯人に仕立てて逮捕し、多くのクリスチャンを処刑したのである。ローマ帝国における最初の迫害である。

この「ローマ人への手紙」は、この火事が起こる前に記されていることから、場面としては、ローマにはまだ平和があり、あらゆる物質において非常に豊かで、また栄え、そして娯楽もあれば、もちろん十分な水も食べ物もあり、近隣諸国からの攻撃や目立った敵などもない、まさに何もかもが充実した暮らしをしている、そういった時であったと言える。

これは、現代の私達とほとんど変わらないように思えるのである。

特にこのメルボルンは、「世界で一番住みやすい都市」だそうだが（しかも連続して選ばれている）、確かに、美味しいカフェもあれば、美しい公園や楽しいキャンプ場、その他の施設なども実に充実している。全体的には平和でオシャレな街といったところだろうか。

面白いことに、逆にオーストラリア人の中には、日本に住みたがってる人もいるようである。日本の「東京・大阪・京都」などは彼らにとっては、ある意味憧れの場所のようである。

さて、時代がいつであれ、私たちは国や都市、そして街が豊かに発展しているところに魅力を感じ、実際にそこを訪れては、「住みたい！」という思いにまでなるのではないだろうか。

一方、華やかな所には、その逆の面もあり、多くの人が集まってくれば、日常のもめ事があちらこちらであったり、また淫らな姦淫の現場、不道德で大酒飲みで乱暴なこと、悪いことをする者達も決して少なくはないのも現実である。ローマ帝国時代も同じような現状があったのである。

そこでパウロは、16節にあるように「私は福音を恥とは思いません」と記したのである。

彼はここで「恥」という言葉を使った。

この「恥」という言葉は、文字通り「恥ずかしい」ということである。

日本人は、この「恥」・「恥ずかしい」ということに対して、非常に敏感である。

アメリカの文化人類学者のルース・ベネディクトという女性が、1944年に日本人の国民性を研究した「菊と刀」というものを書いた。これは戦後、アメリカが日本を統治していく際の基本的路線ともなったそうだが、その中で彼女は、「欧米の文化はいわゆる「神の声を恐れる・罪の文化」であるのに対し、日本人の文化は「世間の目を恐れる・恥の文化」であると規定したのである。

また、ルースについて研究した安藤邦男（1929年三重県出身）は、「菊と刀」の一部を、以下のようにまとめている。

「ルースが言うには、「日本人が強く意識するのは世間の目です。狭い日本、多くの人間の中で生活して行かなくてはなりませんから、常に他人の目を意識しないわけにはいかないのです。怖いのは神や仏ではなく、他人の目であり、他人の口です。他人に笑われたくない、恥をかきたくない、これが日本人の行動を規定しており、つまり、正しいかどうかで行動を決めるのではなく、世間がそれをどう思うかで、自分の行動を決めるというのです。これが恥の文化です。」と、

更に彼は、「恥を表す日本語は非常に奥が深く、恥ずかしさを表す日本語で、例えば「格好が付かない」という微妙な心理を表す語は、洗練された感覚表現で、日本語の豊かさでもある。しかし一方で、世間の目を恥じるということは、世間の目が変われば自分の恥の感じ方も変わるといことになり、それは柔軟な生き方といえませんが、狡い（こすい・（悪賢い））功利的な生き方ということも出来ます」とも記している。

とにかく「恥」とは、常に世間の目が基準であり、ゆえに絶対的な基準はなく、その時の価値判断に左右されるのである。この「恥」を基準に物事を考える思考は、どの国にも、いつの時代でもあるような気がするが、特に日本人に多いことは間違いないだろう。

今から何千年も前にロトという人物が、ソドムという当時最も栄えていた町の一つに住んでいた。

創世記19：14「そこでロトは出て行き、娘たちをめとった婿たちに告げて言った。「立ってこの場所から出て行きなさい。主がこの町を滅ぼそうとしておられるから。」しかし、彼の婿たちには、それは冗談のように思われた。」とある。

彼らの常識で考えれば、神様が街を滅ぼすなどということは、「冗談」であった。つまり「お笑い」なのである。

今から何千年も前の創世記の出来事だが、現代でも全く同じことが言える。この科学の時代に入って、神様がいてなんて「冗談」でしょう。そんなこと信じているなんてまったく「お笑い」であると、人々は思っているのではないだろうか。

パウロは、当時のローマ帝国時代のクリスチャンに対して、「私は福音を恥とは思わない」と記したのである。

見事に栄えたローマ大帝国での日常の常識、また世間の目という基準で考えるならば、「福音を信じるなどということは、冗談であり、お笑いであり、恥ずかしいこと、恥である。」ということが人々の中にあつたのではないだろうか。それ故のパウロの「私は福音を恥とは思わない」とは、彼の確信に満ちた言葉なのである。

私達は、今のこの物質時代の中で、「自分の見えるところのモノ」でしか考えていないことがある。しかし、「命はなぜあるのか、また人はなぜ死ぬのか、死んだ後どうなるのか。そして神はいるのか、神とはどのようなお方なのか。・・・」などという真理については、冗談であり、お笑いであり、恥である。と済ませていることがあるのではないだろうか。

あの有名なマルチン・ルターは、「どうしたら神の恵みを知ることが出来るだろうか。」と悩んだと言われている。

近代は「神はいるのか。神はどこにいるのか」と叫ばれた時代であった。

しかし現代では、そのことさえ叫ばれずに、人々が悩みの淵に立った時は、「なぜ？ どうして？・・・」と、ただ叫ぶだけである。事実、東日本大震災でも同じであった。

これらの叫び方は、時代がどうであっても、実は人々の心の奥底に「救い」というものを求め叫んでいる自分！というものが居るといことではないだろうか。

自分が「救い」というものを実は最も熱心に追い求めているのに、そのこと自体に気づかない、気付けない私達は、本当に大切なことを「恥ずかしい」こと、「恥である。」「冗談である。」「お笑いである。」と盲目になっているのではないだろうか。

16節、パウロは続けて、「・・・福音は、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、信じる全ての人にとって救いを得させる神の力です」と記した。

「福音は、救いを得させる神の力」なのである。福音とはイエス・キリストのことである。

この「福音」、すなわち「キリスト」こそは、「救い」を得させ、与えることができる「神の力」なのである。この「力」とは(ギリ)デュナミス、英語のダイナマイトの語源になった言葉で、その意味は、「力、奇跡」である。奇跡といえば、日常的にはありえない超自然的なものと考えるが、しかしキリストは、私達に「救い」という「神の力(奇跡)」を、私達の日常に生きて働き、その「力」をあらわしてくださるお方である。

なぜ、そのような「神の力」がこの「福音(キリスト)」に起こせるのか。

17節「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて・・・」とある。

「福音」の内には、「神の義」が啓示されている。」とある。

「義」というのは、「正しい」という意味である。

「正しい」というのは、誰がどうやって判断するのだろうか。

①多数決で決めるのか？

先日、日本では、安保理が可決された。それは、およそ人の価値観、また多数決、またはこの世の常識などというのは、まさに時と共に左右され、実に当てにならないものという、人間の弱さを浮き彫りにしたことと言える。そんなものに誠の「義」と「正しさ」はない。

②真理のない宗教を拠り所にするのか？

宗教とは、一般に、ある超越した存在を中心とする観念であり、また体系である。しかしその信じている超越した存在というのが事実に基づいていないものであったら、それほどみじめなことはない。そこには真理が無いからである。そんなものに誠の「義」と「正しさ」はない。

③自分自身のみを信じるのか？

ある意味ではカッコいいと思えるかもしれないが、それは、自己中心の生き方である。自己中心ほど恐ろしいものは無い。言うまでもなく、誠の「義」と「正しさ」はない。

これらはすべて人間の思い、考えがその基準である。結局のところ、本当の「正しさ」、「義」とは、人間には誰一人決めることが出来ないのである。

それを唯一決めることができるのが「神」であり、「キリスト」なのである。すなわち「福音(キリスト)」の内にそれ(義)が啓示されているということである。

さらにその為には「信じるすべての人」、また「その義は、信仰に始ま」とある。

すなわち神が「義」を表しているこの「福音（キリスト）」を信じることによって、生きた「神の力（奇跡）」を日常的に体験することが出来るのである。ゆえに、私達は「信仰によって生きる」のである。

「福音（キリスト）を恥とせず、冗談とせず、お笑いとせず、信じ、救いという神の力を日々体験する素晴らしい信仰」に導かれていることを喜びたい。